"だってコレは同人のお話であって、原作とは何の関係もないんですもの"
このCG集は
湯パーセント趣味で
描かせていただいた
CG集です。
はっぴ～た～ん
戦場ヶ原を始めとする5人のヒロインたち。
彼女らに執拗に性交遊を迫られる阿良々木暦、
その全ではある一人の人間によって計画されたシナリオだった…!?
阿良々木暦と5人のヒロインたちが送る、性旬のCG集――
これぞ現代の
エロス!
エロス!
エロス!
トレモノガタリ
湯物語上
こよみハーレム
お前まで、言ってしまうか同人と。

貝木泥舟との対決後、伏線を回収するかのように、
僕は戦場ヶ原の家「民倉壮」の201号室へと招かれた。
「実は今日ね、親、帰ってこないんだ」
「なぜラブコメ風に言う！
つか待て、そのネタは確か猫物語（白）で羽川に使うネタだろ！
そもそも時系列的に今の僕が知ってるのはおかしいし、
その頃僕はその場にいなかったっ！」
スーパーウルトラミス！
一応今の僕は貝木と対決後ってコトになっているのだ。
「大丈夫よ阿良々木くん。だってコレは同人のお話であって、
原作とは何の関係もないんですもの、時系列なんかも目茶苦茶よ」
「同人ってお前…前から思っていたけどソッチ関係のコト結構詳しいよな、
萌とかツンデレとか、今度は同人か」

「脳みそがミジンコ並の阿良々木くんは知らないかもしれないけれど、今、現代はそう「オタク文化ブーム」なのよ。だから、そういうような言葉はむしろ一般的と言えるわ。」

「そうなのか。」

人が吸血鬼になってる間に世間はがらりと変わってしまったんだなあ…

「それはともかく阿良々木くん？」

「何だよ」

「わたしはお腹がすいていますよ？」

「いや、だからそれも八九寺がまよいマイマイ第二話の締めに僕に言う台詞だ！

いい加減僕たちが小説かなんかの登場人物だと思われてしまうから、そういうメタは止すんだ！」

「失礼、噛みました！」
「いいや、噛んでない！」
そんな突っ込みを気にもとめず、仕切り直す感じで戦場ヶ原は言う。
「そう、では話を戻します。
だから私がせっかく張った伏線を回収出来る機会を設けて、
今布団に横たわっておっぱいとおぱんつ様全開の開脚を披露しながらも、
ほんの照れ隠しのつもりで言ったつもりのボケに対して、
わざわざ突っ込んでいる暇があるのなら
もっと別に“突っ込むモノ”があるんじゃないかしらあ、
と言いたいのだけど。あまり女に恥じをかかせるものではないわ。」
「言い方が下品過ぎる！」

「つべこべ言わない、団長命令よ。言うことが聞けないのなら死刑で私刑よ」

「いつからお前は、北高の園芸部を乗っ取って出来た謎の部の団長様になったんだ!?」

憂鬱なのか!?

「S…戦場ケ原のおっぱいとおぱんつ様を見て股間をO…おおいに盛り上げてS…性交遊に興じる

男（だん）。SOS男。あなたのコトよ阿良々木くん」

「だから下品だって！」

男（だん）って…

「…なんかさ、もっと言い方とか、こう雰囲気とかあるだろ！」

「わからないの？平静を装っているけれど、本当はかなり緊張しているわ。

それに……」
少し伏し目がちになりながら、呟くように戦場ヶ原は言う。
「少し……怖いわ。」
昔の事…4人の詐欺師の内の一人に乱暴されそうになったこと…。
それを思えば、怖いのも無理もない。
戦場ヶ原の鋼の様な貞操観念はそれらのコトが原因なのだ。
しかし、彼女は貝木と対決を果たし、過去と決別するために
勇気を振り絞って僕に全てを委ねようとしてくれている。
ならば、僕はその気持ちを受け止めなければならない。
優しく包みこんでやらなければならない。
なぜなら僕、阿良々木暦は、
彼女…戦場ヶ原ひたぎを愛しているのだから。

「わかった。もう何も言わないよ。
僕に全てを委ねてくれ！必ず、怖い思いはさせないから」
「……はい。」

「これが戦場ヶ原のおっぱい…すごくやわらかい。」
「ん、あっ」
サワ
サワ
サワ
サワ
阿良々木くんの…手…すごく優しい。いつも…いつだってみんなに優しいこの手、今は私だけの手。

「んっ、ん…」
「んふぅ、んんっ」
他人に胸を触られるのが
こんなに気持ちいいと感じるなんて…
いいえ、多分阿良々木くんだから…♡
はぁ
はぁ
ピーコ
サワ
サワ
サワ
サワ
じわ…

「乳首勃起ってきたね。」
はぁ
はぁ
サワ
サワ
サワ
サワ
「そん、な事、んっ、いちいち言わな、
んんっ、で頂戴。」
恥ずかしい…
身体が熱い、乳首溶けちゃいそう。

「戦場ケ原、すごく可愛い。
ココももうトロトロだね」
ぽ～
「あまりジロジロ見ないでくれるかしら？
童貞丸出しよ。」
ビッ
ビッ
トロ～

「良いじゃないか、僕はお前が初めてで戦場ヶ原は僕が初めてなんだし。」

ぽ～

ビクッ

ビクッ

「む。」

初めてのくせに随分余裕じゃない。

阿良々木くんのくせに生意気よ。

トロ～

ごく…

「じゃあ、舐めるよ。」

ドキドキ

やだ、阿良々木くんの息が当たってる…

くぱぁ

「んっ、んん、んうっん、ん、ん、。」
舐めてる音…
すごくいやらしい…
ちゅ
ぺろ
ぺろ

「あっ、あん、あっ
や、ソコ…ダメっ、痺れちゃう！」
やだ、変な声勝手に出ちゃう！
ビクン
ぺロぺロ
ちゅぱ

「気持ち良い？」

「そ、そな、んっ、事、聞かないでよっ」

やだ…イきそう…

阿良々木くんの手でイっちゃうっ！

ビクンッ

ビクンッ

クチュ

クチュ

「やっ、激しいっ！
あぁぁぁぁっ!!!」

ビク
ビク

ビン
ビン

もうダメっ！イクっ、イっちゃう！

クチュ
クチュ

クチュ
クチュ

イクっ!!!!
ビクン
ビクン
「んんーーーっ!!!!」
プシャアアアア
ビク
ビク
ビク
ビク

『……。』
はぁ
はぁ
はぁ
イっちゃった……。
トロ～

「戦場ヶ原、僕もう我慢できないよっ！
挿入れるよ？」
ビクッ
「え？ちょっと待っ……」
今、イっぱかりなのに、挿入れちゃうの？
ピト…

「んんーーーっ!!!」
ビクッ
ズブッ

「すげえ、戦場ケ原の膣内、超気持ち良いよ！
てか、血い出てるけど痛くない？」

はぁ はぁ

「だ、大丈夫よ、続けて頂戴。」
イったばかりで敏感になってるけど、
痛みより快感の方が強いみたい…

パチュン パチュン
パチュン パチュン
ジュヴ ジュヴ

「やべぇ、気持ち良すぎて、腰止まんないよ！」
「あっ、あっ、あん、あぁん
はぁ
はぁ
はぁんんっ、くぅん」
すごい…もうわけわからない…
何も考えられない…
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
ジュグ
ジュグ

「ダメだっ、僕もうイクよ！
戦場ヶ原！膣内で出すぞ！」

「あっ、あっ、あっ、あっ、あぁん、あぁっあっ
あっ、あっ！」
もう何でもいいっ！
イク、イク、イクぅぅぅっ！

はぁ
はぁ
はぁ

ビク
ビク

パン
パン
パン
パン

ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ

「出るっ！」
ビクンビクン
ビクンビクン
「んんぎぃいいーーっ!!!!」ビクビクプシャアアアアアアビュルビュルビュルビュルビュルビュル

「ああ…はぁ、はぁ、すげえ気持ち良かった、戦場ヶ原は？つか、避妊とか大丈夫だったのか？」

はぁ はぁ はぁ

「あ…あ…ああ…あ…」

「ダメだ、全然聞こえてない…。でも、すごく気持ちよさそうな顔してるなあ、初めてにしては上出来かな？」

ビク

ヒク ヒク

ドク…

ビク

後日談というか、今回のオチ。
その後、二回戦目に突入したのだけど、当然僕に主導権はなく、
初めてで二回もイかされたコトを根に持ってか
僕の分身は散々文房具で弄ばれた。
その内容は割愛するが。
まったく、半吸血鬼じゃなかったら、えらいコトになっているところだ。

いつもの様に偶然道端で八九寺と出会った。
しかし八九寺の様子はいつもとは違っていた。
唐突に僕の家に行きたいと言い出したのだ。
どういうつもりだ？
まあ、僕としては断る理由もなく、ましてや八九寺の方から家に行きたいなんて言うのはとんでもなく珍しかったので、僕は快くOKして家に連れて行ってやるのだった。
僕の部屋に入るなり、八九寺はベットに横たわり、
ぱんつ全開の大股を開き、脚でアルファベットのMを作る。
M字開脚である。
「あの、ロリ好きさん」
「人をただの小さい女の子を性の対象にするような変態みたいな言い方で呼ぶんじゃない！僕の名前は阿良々木だ！」

「失礼、噛みました。」
「違う、わざとだ。」
「かみまみた！」
「わざとじゃないっ!?」
「割れ目見た？」
「いや、さっきからそんな体勢でいたら自ずとそこに目が行ってしまうんだけどな、八九寺よ。一体どういうつもりなんだ？」
「いえ、阿良々木さんのコトだから、鬼物語のラストシーンでのキスだけでは物足りないんじゃないかなぁと思い、こうしておまた全開のTパンツでお誘いしているのです」
「ちょっと待て！今は一体いつなんだ!?」
少なくともそのシーンの後じゃないだろ!!」

「大丈夫ですよ阿良々木さん、これは同人というものですから、作者が好き勝手補完したものです。だから時系列も関係ありませんし、浮気にもなりません。」

「なんだ同人って！

僕たちが物語かなんかの登場人物みたいな言い方はやめろ！そういう存在自体が危うくなるメタは止すんだ！」

と、僕のツッコミに対して

何かじれったいような表情を浮かべながら八九寺は言う。

「もう、察しが悪い人ですね！

だから、その……私はですね、

阿良々木さんのコトが……き、なんですよ！

あのラストシーンを思えば察しがつくじゃないですかあ!!」

「だからその、ごによごよ…しないと…成仏出来ないん、ですよ。」
「ん？八九寺よく聞き取れなかったぞ？もう一回言ってくれ。」
「い、言わせるなよ、恥ずかしい！」
なんだコイツ、すげえ可愛いぞ！
八九寺はほっぺたを真っ赤に染め、いつもならここからまた話を膨らませるだけのパスも叩き落とし、真剣な赴きで言うのだった。（台詞はネタっぽいが）
本当にいつもと違う。
逆境に弱いメンタルの小さな少女が精一杯の勇気で僕に告白してくれたのだ。
ならば僕もそれに応えてやらなければならない。
「…八九寺。わかった。全部僕にまかせろ。」
「…はい。ロリ好きさん。優しくして下さいね。」

「ん～八九寺、可愛いぞお、ペロペロ」

「あ、阿良々木さん いきなりペロペロですかあ？」

あ、んっ、ん…」

そんなトコ舐められたらゾクゾクしちゃいますう。」

ペロペロ

サワサワ

サワサワ

「やべえ、八九寺の太もも、スベスベのプニプニですげえ興奮する。」

『ん、うん、んんっ、ん…』

そんな口に出して言われると恥ずかしいじゃないですかっ！

なんでこんな変態のコトを…。

ピンコ

ペロペロ

じわ…

サワ サワ

サワ サワ

「ん、ん、んふう、んっ」
でも、やっぱり、そんな阿良々木さんを
いつだって阿良々木さんのままだから好きになってしまったんですね。
ペロペロ
サワサワ
サワサワ

「おおっ、お前って発育はいいくせに、ココはまだツルツルなんだなぁ。」
『わ、私は愛されキャラなので、需要にお答えしているだけですよ。』
ぽ～
ビッ
ビッ
トロ～

「いいや、違う！
お前は、僕のためにツルツルでいてくれたんだっ！」

『な、何訳のわからないコトを言って…あっ！』

ぽ～

ビン
ビン

トロ～

「広げちゃダメですぅっ」
「うお…コレが八九寺の…クリ剥けてないんだな、ビラビラもこんな小さくて…」
くぱぁ
阿良々木さんに見られてる…！
すごく近いです、息が当たってますぅ！

「あっ、ん、はぁ、んん」

『そんな、トコ、舐め、ちゃあぁ』

ヤダ、阿良々木さんに、私の大事なトコロ舐められちゃってますぅっ！

ビクッ

プロプロ

ジュル

ジュル

「あ、阿良々木さん、私、何かふわ、ふわして、来ました。アソコもジンジンして、何か上ってくる、んっ、感じ、です。」
『八九寺、お前イきそうなんだな？」
『行く？、あっ、ですか？、んんっ」
はぁ
はぁ
キュン
キュン
ペロペロ
ペロペロ

「違う、“イク”だ。耳年増なお前が知らないわけないだろ。」
『いえ、本当に、あっ、知りま、んっ、せんよ、お。』
『よし、じゃあ今イかせてやるから、イク時ちゃんと“イク”って言うんだぞ？」
はぁ
はぁ
キュン
キュン
ペロペロ
ペロペロ

「ん～～～～っ!!」

すごいです、阿良々木さんの手で

膣内かき回されちゃってますぅっ!

だんだん、何かが、上って…

上って…

ビク

キュー

キュン

クチュ

クチュ

クチュ

クチュ

「あああっ！今、ソコ触っちゃぁああっ!!」
「八九寺！イクのか!?イクんだろ!?」
『あああああぁぁっ!!
イきますうっ!!イっちゃいますううう!!』
キュー
キュン
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
ジュヴ
ジュヴ
ビク
ビク

「イきま、
んんーーーっ!!!」
ビクンビクン
ビクビクビク

「はぁ、はぁ、しゅ、しゅごかった、れふ…。」

身体に力が入りません。もう、動けません。

ぽ～

はぁ

はぁ

ビク

ビク

ビク

トロ～

ヒク ヒク

「あひゃひゃひ、ひゃん？（阿良々木さん？）」

「八九寺、はぁ、はぁ、我慢出来ないよ。」

可愛いよお、もう、

ビク

はぁ

はぁ

ビン

ビン

ピト…

え？今、全神経がアソコに集中しちゃってる感じなのに

そんなモノ挿入れられてしまったら…

ビク

「待っ…」
ビク
んんーーーっっ!!!
ズブッ

「あっ、あっ、あぁあっ」

「八九寺っ！ヤダ、締まるっ」

パチュン

ビクビク

パチュン

ビクビク

きっからビクビクが止まりませんっ

イきっぱなしになっちゃってますぅっ

ビクビク

「くうっ、八九寺いっ
膣内、ビクビク脈打って
もうダメだ、イクぞっ！」
『ああぁ、ああああっ
わらひも（私も）」
また、大きいの来ちゃいますっ！
パン
パン
パン
パン
パン
パン
ビクビク
プシュッ
プシュッ
ビク
ビク
ビク
ビク

「出るっ!!!!」

「イっ、んんーーーっ!!!!」

ビクン

ビクン

ビュル

ビュル

プシャアアアア

プシュッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

「あひゃひゃひゃん、ひもひよはったれふ。ほれへ、わらひも……
（阿良々木さん、気持ち良かったです。これで私も……）」
『八九寺……
違うよ、僕の名前は、阿良々木だ……。』
『ひふれぇ、はみまは……。』
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ヒク
ヒク
ビク
ドクン…

後日談というか、今回のオチ。
あの後、八九寺はあのまま、幸せそうな顔で逝った。
たく、最期のは噛めてないっての。
最期まで、いつもと違う八九寺だった。

久しぶりに神原に家に呼び出された。
用件は聞かなかったが、
またいつもの部屋の片付けだろうとそのつもりで
来たのだが…しかしそうではなかった。
「神原、見たところ部屋は散らかっていないみたいだが、
僕はなんで呼び出されたんだ？
そして、どうしてお前は尻をこっちに向けてんだ！」
「うむ、見ての通り片付けは先日大急ぎで済ませた。
だから今日は別の用件でご足労頂いたのだ。」
「ふむ。で、お前のその体勢と何か関係があるのか？」
「さすがは阿良々木先輩だ。
私の考え等は全てお見通しなのだな。」
いや、普通そうとしか思わないだろ。
「実は先日、戦場ヶ原先輩から
阿良々木先輩と性交遊を果たしたと伺ったのだ。」
「プライバシーもあったもんじゃないっ!!」
「それで、
私は是非戦場ヶ原先輩と竿姉妹になりたいと思い、

こうして阿良々木先輩に頭を下げて、
もとい、尻を上げてお願いしようと、
そういうコトなのだ。」
ヴァルハラコンビは一方は鋼でもう一方は
こんにゃくのような貞操観念の持ち主であった。
「あのなぁ、神原、そういうコトは
そんな軽い気持ちでやっちゃいけないと思うんだよ。
第一、戦場ヶ原が黙ってないと思うぜ？
お前も僕も殺されちゃうぜ？」
「ああ、そのコトなら大丈夫だ。
戦場ヶ原先輩にはちゃんと許可をもらっている。」
「軽いなぁ!!」
「それから、こうも付け足していた。」
「同人なんだからそれくらい多めに見るわ。
それもエロ同人ともなれば、
そうでもしないとお話にならないでしょ。」
「また同人か！」
同人なのか!?僕たちは同人作品なのか!?

「あああもうわかったよ！
突っ込みを入れるのも馬鹿馬鹿しい。
お望み通り、僕のマグナムを突っ込んでやる！
半吸血鬼の僕は一味違うぞ！」
「ふふ、その気なったようだな、阿良々木先輩。
この神原駿河、その攻め、
全て受けきってみせよう！」

「前戯は無しで頼む！」
「いやいや、ソレじゃ僕の気持ちが高まらないんだよ！」
「ふむ、なら仕方ないか。」
「遠慮は要らない。
どんな風でも、好きに触っていいのだぞ。」

サワ サワ
サワ サワ
「そういや、スパッツの下はどうなってるか前に話したよな。この感触からすると、お前やっぱり…。」
「ははっ！バレてしまったな！これで私が如何に変態かわかっていただけたかな？」

サワ サワ
サワ サワ

「私が“口だけの”女ではないコトもわかっていただけたかな？」

「お前、まだソレ根に持ってたのか…。
ああ、このムチムチの尻に免じて、信じてやるよ。」

「わかれば、あっ、んっ、良い、のだ、はぁん。」

じわっ

クチュ
クチュ

「つか、すごい濡れ方だな、」
クチュクチュ音がしてるぜ。」

スパッツ越しなのに

ピッコ

「あっ、その手が、ああん、戦場ヶ原先輩の
身体を這ったと思、うだけで、私は、
戦場ヶ原先輩を感じられ、るのだ、んんっ。」

クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
「大した妄想力だな、ホント。
つか、スパッツ脱がせにくいんだけど、どうする？」
「んっ、ああん、あっ、あっ
破ってくれて構わないぞ、代えはいくらでもある。」

「阿良々木先輩、もう我慢出来ない！
早くソレを思い切り突っ込んでくれっ！」
トロ～
はぁ
はぁ
「あ、ああ、わかった。行くぞ！」

「よし、じゃあ…」

ヒクヒク

はぁ

はぁ

ドキ

ドキ

なんて太くてたくましいんだ…。

戦場ケ先輩はこんなモノで初めてを…ならば私も！

「ひひ――――ひひ」

ぷにぷに

ぷにぷに

ぷにぷに

「さ、さすが阿良々木先輩だ…。
初めてなのに挿入れただけで、イってしまうだぞ。」

ビク

ビク

ビク

「うわ、神原の膣内すごい締め付けだっ
僕ももう我慢できないよ、動くぞっ！」

なな

なな

なな

今イったばかりなのに、動かれたら、
私はどうなってしまうのだろう。

「あああああああっ!!!」

パチュン ビク

パチュン ビク

パチュン

パチュン

さっきからイきっぱなしだっ!!!

イクの止まらないっ!!!

パチュン

パチュン ビク

パチュン

「うああ、神原、ヤバイヤバイっ!!!

膣内ビクビク脈打ってるっ!!!腰止まらねえっ!!!」

パン
ビク
ビク
パン
ビク
ビク
パン
ビク
ビク

「ミししみみみ

「神原、ごめんな、
途中から夢中になっちゃって……。」
ビク
ビク
ドク…
ビク
ビク
ビク
ビク
ドク…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
「ああ、わらひいは、ほのふらいは、ひょうほひい。
（ああ、私にはこのくらいが調度良い。）」

後日談というか、今回のオチ。
その後、神原が落ち着いた頃、
驚くべき事実を打ち明けやがった。
「戦場ヶ原先輩に許可をもらったと言ったな、
アレは嘘だ。」
次に戦場ヶ原に会った時に、
僕は無事でいられるのだろうか…。

暦お兄ちゃんは撫子の裸を見ても、
いやらしい気持ちにならないかも知れませんが、
撫子は暦お兄ちゃんのコトを想うと
身体の中心が熱くなって、胸がモヤモヤして、
時々おまたから変なおつゆが出て、
ぱんつを汚してしまいます。
たぶん、これはいやらしい気持ちなんだと思います。
世間では撫子はラスボス扱いされていて、
永遠の片想いのためだけに暦お兄ちゃんを好きでいる
みたいに思われているかも知れませんが、
それは全くの誤解です。
「私」が思うところ、
今の撫子は同人の中の撫子なので、
原作とは一切関係がないのです。
「そういうメタはよすんだ！」と、
暦お兄ちゃんの声が聞こえた気がしますが、
きっと気のせいです。

漫画家を目指す撫子は同人にも精通してるのです。
えっへん。

だから撫子は今でも暦お兄ちゃんが大好きです。
思い込みだけで神様を作り、
遂には神様にまでなってしまった撫子ですが、
最近はその思い込みで
目の前に暦お兄ちゃんを作ります。

今日も目の前の暦お兄ちゃんは
撫子の胸のモヤモヤを消すために、
優しく抱きしめてくれます。

ど　麻痺したその世…
ハンスは極じ　かな。
ど　そな　そこが
ゎん
ゎん
ゎん
ゎん

「ゆ、ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ」
いきなり性器をさわられた気持ち
ゆ、ゆ　ゆ、ゆ
みたい擬ロリ・ボディ
ゆゆ　ゆゆ　ゆゆ
ガチガチなどうかの国

…いえ元気…や
ロレーナ様大丈夫
集中し
言葉遣いが…
ちゃんとやる気
のかやっぱり
っちゃいるから。
ピサピサ
ぬるぬる
ドピュ

ちゅー　ちゅー
ぴちゃっちゃっぴちゃっ
くぱぁぁっちゃっちゃっくぱぁぁ
ぴくん
ぴくぴくぴく

ピチピチ

「そこ　そこが　そんなに…」
指をしゃぶりながら
ヤバいくらいの声で
…吐くコトバ
反芻する…
ぴくぴく
ぐりぐり
ぐりぐり